

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑦

イタリア的幸福のレシピ

緋月 まや

一目惚れは、イタリアを象徴する恋愛の形だ。イタリア語では、一目惚れのことを比喩的に「稲妻の一撃」——colpo di fulmineという。イタリア人にとって恋は稲妻なのだ。時間にルーズで普段はのんびりとした彼らが、ひとたび稲妻に打たれたならば人格が変わったかのように、一心不乱にその恋を突き進む。映画の世界を覗いてみれば、『踊れトスカーナ!』(1996年、レオナルド・ピエラツチョーニ監督・主演)では、まじめな会計士の青年がフラメンコダンサーに一目惚れ。早く彼女に会いたいとバイクを飛ばしているうちにブレーキが故障、家の壁に大激突してしまう勢いだ。宝物だったバイクは大破、自分も怪我を負ってなお、恋のテンションは上がりっぱなしである。大戦中のシチリアを舞台とする『マレーナ』(2000年、ジュゼッペ・トルナトーレ監督)では、12歳の少年が夫の生還を待つ年上の女性に魅せられる。類まれな美貌が村人の誹謗中傷を呼び、敵兵の娼婦に身を落としていくマレーナの悲しみに寄り添い、寝ても覚めても彼女を想い続ける。どこに惹きつけられるかは十人十色だ。少年はマレーナの艶めかしい曲線美に魂を奪われた。演じているのがイタリアの宝石モニカ・ベルッチであるからにはそれもうなずける。

ワインの世界にも一目惚れはある。目にした途端、吸い込まれてしまうようなラベルのデザインがある。そんな時は、「ジャケ買い」の衝動に駆られて、奇妙なほどにテンションが上がっていくのだ。

「ゴージャス系」—Lussuoso

まさに、モニカ・ベルッチの曲線美をデザイン化したような美女がポーズを取っている。指先から木の蔓が巻き上がっているところをみると、葡萄の精だろうか。いや、その立ち姿と腰まで届く金色の髪は、ルネサンス期の画家ポッティチェッリの名画「ヴィーナスの誕生」を彷彿とさせる神々しさだ。きっと彼女は葡萄の女神に違いない。



【エノテカで微笑む葡萄の女神】

ソムリエ研修をしていたフィレンツェの老舗エノテカで出会ったのだが、あまりにも高価だった。三カ月の研修中、その姿を眺めてはため息をつばかり。さながら、マレーナに魂を奪われた少年のようだ。ほんの少し触れてみるくらいなら許されるだろうか。ある日、ボトルにそっと手を伸ばした瞬間を店のスタッフに目撃された。取り繕うように「これ、美味しい？」と尋ねてみる。「そりゃあ、ものすごく美味しいよ」。ますます想いは募る。でも、手が届かない高嶺の花。

どうしてそんなに高価なのか。それは、アマローネだからだ。かつては貴族しか口にできなかったと言われる。イタリア北部ヴェネト州特産の赤ワインで、陰干し葡萄からつくるのだが、水分が蒸発して果汁量が少なくなる分、生産量が減るので希少価値が高い。しかも、恋したのはアマローネの最高級ブランドを名乗るドミーニ・ヴェネティのリゼルヴァだ。リゼルヴァは熟成期間が長いいため、さらに価格が跳ね上がる。

新型コロナウイルスによる二回目のロックダウンが目前に迫った秋の日、意を決して店を訪ねた。研修期間が終わっても、どうしても忘れることができなかったのだ。出会った日から二年の歳月が流れていた。自分史上最高額のジャケ買いに身を投じてみれば——。なんという甘美さだろう。まさしく葡萄の女神だ。なめらかな舌ざわりと共に、黒葡萄の濃厚な甘みと皮の苦みが押し寄せてくる。それでいて繊細で、舌の上で味が複雑に変化していく。とろけていくチョコレートのような芳香も官能的だ。一夜の夢に酔いしれた。

「ロマンチック系」—Romantico

青い月明かりの夜、ドレスをひるがえしながらひとりの女性が大階段を降りてくる。そのロマンチックなラベルのイメージとは対照的に、ボトルの中身は甘みも渋みも力強く驚いた。おまけにアルコール度数は14.5%もある。CENERENTOLA(シンデレラ)というワインの名前と、懐に厳しすぎない価格が魅力的で迷わずジャケ買いしたのだが、ずいぶんとたくましいシンデレラだ。

真夜中を告げる時計の音を聞きながら、舞踏会を後にする場面だろうか。けれど背景には宮殿でなく、なだらかな山の稜線と背高のつぼの糸杉

が描かれている。オルチャの谷だ。ユネスコの世界遺産にも登録されたトスカーナ南部の景勝地であるが、ワインのまちとしてのオルチャは、モンタルチーノとモンテプルチアーノという二つの銘醸地の間にあって、それらと比較すれば若い。この境遇が自分より上位にある二人の姉を持つシンデレラに重ねられているのだ。

生産者のドナテッラ・チネッリ・コロンビーニさんは、イタリアで初めて女性だけで運営するワイナリーを創設したチャレンジャーだ。シンデレラには、トスカーナの葡萄畑から百年前に消えた幻の品種フォリア・トダを甦らせてブレンドするという魔法を仕掛けた。そのため酸味が抑えられ、熟れた果実の甘みが前に押し出されたのかもしれない。



【オルチャの谷のシンデレラ】

「オシャレ系」—Elegante

中世以来、ヨーロッパの貴族たちは手紙の封を閉じる時、蠟を垂らしてスタンプを押した。これを封蠟という。そこには手紙を書いた本人かその家系を表すシンボルが刻まれていて、差出人を証明する役割を担っていた。その封蠟をワインボトルに飾りつけたなら、こんなにお洒落になる。二本並んでいると、いかり肩のボトルは礼装の貴公子、なで肩はドレス姿の貴婦人に見えてくる。宮中の晩餐会に招かれた気分だ。赤い蠟に目を凝らせば、スタンプには山々の頂にたたずむ狐の

姿が刻まれていた。ならば、招待状の差出人はこの狐ということか？

ぜひともペアで並べておきたいが、懐事情から、なで肩の貴婦人を選んだ。メド・クラッシコと呼ばれる高品質のスプマンテ(発泡性ワイン)である。Metodo classico「伝統方式」とは、シャンパンをつくるのと同じ「瓶内二次発酵」という製法を意味する。炭酸ガスを生成させる二回目の発酵を、タンクではなく一本一本の瓶の中で行う昔ながらのやり方であるため、大変な手間がかかる。



【赤い封蝋の「貴公子」と「貴婦人」】

コルクを抜けば、絹のようにきめ細かい泡が口の中で優しく溶けていった。ブリュット(辛口)なのに、さくらんぼや木苺を思わせるほんのりとした甘みが広がる。なるほど、イタリア語で「お洒落な」は「elegante」な訳だ。なんとも雅な味わいである。フランス原産の国際品種ではなく、トスカナ黒葡萄サンジョベーゼからつくられているところも興味深い。

赤い封蝋の下、ラベルにはVOLPAIAという文字が記されている。ヴォルパイア、それは中世の面影を残す美しい村で、何世紀もの時を超え、そのサンジョベーゼを育ててきた悠久の丘陵地帯

の高みに位置する。つまり、スタンプの中、狐がたたずんでいる山々の頂は、そのヴォルパイアの大地なのである。その大地こそが、招待状の差出人だったのだ。



【ヴォルパイアのワイナリー「Castello di Volpaia」】

*

一目惚れの映画と言えば、イタリアのチャップリンとも称される喜劇俳優ロベルト・ベニーニが監督・主演を務めた『ライフ・イズ・ビューティフル』(1997年)にも胸を打たれる。ホロコーストという重いテーマを題材にしなが、純然たる愛の物語であるこの感動の名作では、ベニーニ扮するひとりの男性が生涯「プリンチペッサ(姫)」と呼び続けることになる女性に心を射抜かれ、荒唐無稽な猛アタックを繰り返し、結婚にまでたどりつく。ユダヤ人強制収容所という生き地獄で、死に際してもユーモアを忘れることなく、命を賭して愛する妻と息子を守り抜く。なんと見事な生きざまか。

「自分軸」と「他人軸」という心理学用語がある。自分がどうしたいか、自分の価値観に沿って行動するのが自分軸で、周囲の価値観に応じて行動するのが他人軸だ。映画の主人公たちが一目惚れを突き進む姿は、自分軸で生きるイタリア人像を浮かび上がらせる。稲妻の一撃をエネルギーにして、わが道を切り開いていくのだ。

生きたいように生きる。それがイタリア的幸福のレシピなのかもしれない。自分の直感でその手に取った、香しいワインを傍らに。La vita è bella——人生は美しい。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

* PRIDEを見て考えたこと*

二宮 大輔

イタリアからPRIDEの動画が送られてきた。ここで言うPRIDEというのは、総合格闘技のイベントのことでなく、今井美樹の楽曲でもない。ゲイ・パレードのPRIDEのことだ。送られてきた動画には「イタリアでは今こんな感じ」という友人からのメッセージも添えられていた。なるほど、大通りいっぱい広がった人の群れが、80年代イタリアの大ヒット曲Ricchi e poveriの”Sarà perché ti amo”を大合唱しながら練り歩いている。動画をざっと確認したかぎり、マスクをつけている人は一人もいない。初夏の明るい日差しや、アップテンポの曲調も相まって、日本とはおよそ雰囲気違って見えた。

これがきっかけでPRIDEが気になったので調べてみた。ニュースでもよく見かけるが、そもそもどういってお祭りなのか。この発端は「ストーンウォールの反乱」らしい。1969年6月にニューヨークのゲイバー「ストーンウォール」に警察が介入したのに対し、居合わせた同性愛者たちが激しく抵抗した事件のことだ。後にこの反乱は権力による同性愛者の迫害に立ち向かう象徴的な出来事とみなされるようになり、これを記念して毎年6月、世界各地でPRIDEと称するパレードが行われるようになった。当初はゲイ・パレードと呼ばれていたが、レズビアンやバイセクシャルなど、他の性的マイノリティへの配慮から、1970年代から徐々に「PRIDE」という名称が使われ始めた。

そうだったのか。言われてみればPRIDEは毎年この時期に開催されている気がする。私が知らないだけで、きっと日本でも行われていたのだろう。そう思って検索をかけてみると、『五体不満足』の武洋匡さんを先頭に、曇天の下、同性愛を象徴する七色のマスクを着用して、道路の片側を歩くパレードの動画が出てきた。イタリアのものとは比

べると規模は明らかに小さく、周囲を圧するパワーも感じられない。直前にイタリアのPRIDEの動画を見たからだろうが、なんとも言えない切ない気持ちになった。

このように日伊を比較してみて、日本とは違う開放的なイタリアの風土を称賛するという構図は、コロナや同性愛に限らず、様々な状況で見受けられる。ただ、プロのイタリア・ウォッチャーとして原稿を執筆している私は、そのような単純な構図を疑ってみたくなる。果たしてイタリアは本当に同性愛者にとって開放的な国なのか。

私にゲイの友人が初めてできたのは約15年前、イタリアでのことだった。ローマで同時期に日本食レストランのアルバイトをしていたシチリア出身のA君だ。正確に言うと、こんなに大っぴらにゲイであることを公言している友人は初めてだった。それほどまでに、彼の態度や仕草は明らかだったし、周りの同僚たちも、ごく自然に彼に接していた。イタリアに留学した頃の頃で、「これがイタリアのスタンダードなのか」と感じ入ったものである。

問題はここからだ。彼をはじめ、当時の日本食レストランには日本語を勉強しているイタリア人が数多く務めており、バイトが休みの日に数人で会って、互いの母国語を教え合ったりしていた。ある日、我々の語学交換勉強会の場に、新しい日本人の男性が参加することになった。私は仲介役として、日本人男性と、A君たちイタリア人を交互に紹介したのだが、その紹介の仕方がまずかった。「彼はAという名前、ゲイなんだ」。この私の紹介にAが激怒した。今となってみれば、確かに思慮にかけない言動だったと反省しきりだ。だが、あれだけオープンなのに、わざわざ言葉で説明せずとも明らかなのに、そこは自分のタイミング、自分のやり方で、相手に性的指向を伝えたいという繊細さを持っている事実が、当時の私には意外でならなかったのだ。

その後、職場や学校で、日本に帰国してからは観光ガイドの仕事で、イタリア人の同性愛者たちと知り合い、仲良くなった人も数人いるが、A君との一件以降、注意深く様子を見ていると、それぞれ他人との距離を意識しつつ生活しているような印象を受けた。たとえ表面的にはオープンに見え

るイタリア人でも、性的マイノリティであることで、周囲と上手くいかなかったり、傷ついたりすることがあるのではないかな。

だから、イタリア映画や小説に見る同性愛の描かれ方にも不思議はなかった。近年は、アマゾン・プライムで見放題配信が始まる『天空の結婚式』(Puoi baciare lo sposo)や、昨年のイタリア映画祭で上映された『幸運の女神』(La dea fortuna)など、日本に紹介される例も増えている。とりわけ顕著なのがNetflixだ。昨年、Netflixのオリジナル作品では黒人が主人公の比率が通常の映画よりも高いという調査報告書が発表されたように、Netflix内にガイドラインがあるようで、性的マイノリティというテーマにも焦点を意図的に当てているようだ。そんな作品のひとつ『暗黒街』(Suburra)については、過去の記事「マストロヤンニをさがせ」でも書いたことがある。厳格な男性社会であるロマ族の跡取り息子スパディーノが、ローマの地元ギャングの一人アウレリアーノに密かに思いを寄せ、最終的に告白するのだが、「気持ち悪い」とはねつけられてしまう。この場面が象徴するように、大多数のイタリア映画では、同性愛者の迫害に対する苦悩や、周りの無理解が描かれている。

このことからわかるように、イタリアは同性愛者にとって開放的というわけでは全くなく、ホモフォビアが根強く残る一面もあるのだ。経済協力開発機構の2019年報告書では、イタリアにおける同性愛の受容度は日本よりもずっと低くて、加盟国36か国中30位、しかも数値的に改善がまったく見られていないという結果もでている。ただ、開放的ではないに関わらず、友人からの動画で見られるPRIDEのパレードのエネルギーは何なのだろう。エネルギーの出どころには、各時代、性的マイノリティのアイコンと言えるような文化人、知識人の存在があったのではないかなと思っている。

例えば、1990年代から2000年代にかけての性的マイノリティのアイコンとして知られているのが、トランスジェンダーのヴラディミール・ルクスーリアだ。1965年、プーリア州フォッジャに生まれ、ロー

マ大学を卒業。性的マイノリティの活動家として、1994年にローマのPRIDEを立ち上げたのも彼女だ。同時にクラブ・イベント「ムッカッサシーナ」のオーガナイザーとして名を馳せ、その後、TVタレントとしてもブレイクする。2006年には下院議員選挙に当選し、ヨーロッパで初めて国会議員になったトランスジェンダーの肩書でも知られるようになった。

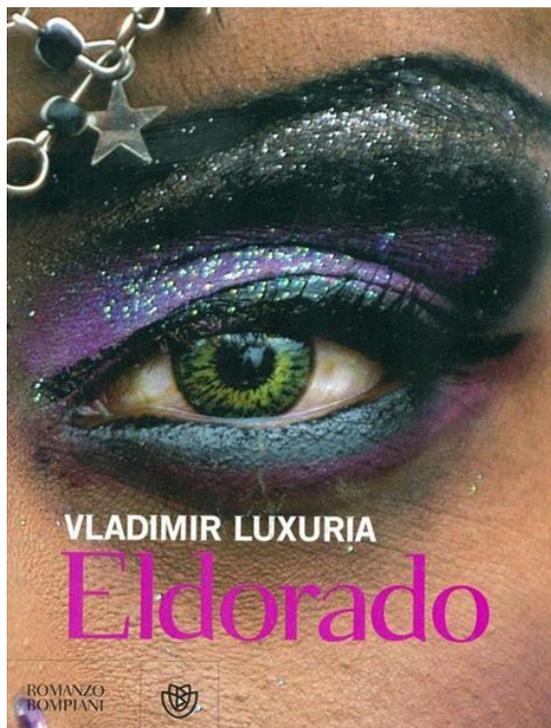


【ヴラディミール・ルクスーリア】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Vladimir_Luxuria

タレントや議員として討論に参加する姿が印象的なルクスーリアだが、ここでは2011年に彼女が刊行した小説『エルドラド』を紹介したい。1980年代、ミラノに住むゲイの舞台俳優ラファエレは、ある晩、その気があると思って自分の車に乗せた見知らぬ青年と逢瀬を楽しもうとしたところ、青年にナイフを突きつけられて、金品と車を奪われてしまう。事情聴取のため、警察から自動車登録番号をたずねられるが、ラファエレはその番号をどうしても思い出せない。自宅で自動車登録の資料をさがしまわっていると、手紙や学校の成績表など、遠い過去の思い出の品々の入った箱が出てきた。ラファエレはこれをきっかけに過去を振り返り、

1930年代、ドイツのクラブ「エルドラド」で歌手として働いていた自らの青年時代を思い出す。人気のゲイ・クラブだったエルドラドには、ラファエレの同僚で「二姉妹」と呼ばれていたフランツとカールがおり、ラファエレと三人で舞台上上がり、大いに観客を沸かせていた。ところが、同性愛に否定的なナチズムの台頭により、クラブを閉鎖するためナチス親衛隊が闖入し、二姉妹は強制収容所に送られてしまう。



【『エルドラド』表紙】

出典: <https://www.ibs.it/eldorado-libro-vladimir-luxuria/e/>
9788845267109

自らもクラブ・イベントのオーガナイズに携わっていたルクスーリアは、ドイツに実在したエルドラドに興味を持ち、ナチスによる同性愛者の迫害というテーマに辿り着いた。小説のなかで回想を終えたラファエレは、現状を顧みて怒りがこみあげてくる。

ラファエレは憤慨した。なぜなら、独裁という灰の下、消えたように見える悪意の炭火が、無関心の風に焚きつけられて再燃したとき、この世界は、すべてを焼き尽くす炎が燃え上がるの

を防ぐために、何とかしようとしなかったからだ。トリオを組んだドイツ人姉妹を掴んで連れ去ってしまう大きな爪が光る鷲の悪夢はもう見たくない。

「無関心の風に焚きつけられて」という部分が、なんとも心に刺さる。ルクスーリア自身も、自宅前の壁に「トランスジェンダーは出ていけ」という落書きがされるなど、有名なゆえにたびたび被害にもあっている。そんな彼女が、声を大にして問題を提起し、発信することが、日本にはない開放的な風土を確保するのに一役を買っているのではないと思われる。

イタリアは決して同性愛者にとって住みやすい国というわけではないが、だからといって縮こまることなく、発言しやすい環境も一部にはある。それを後押ししているのは、ルクスーリアのような果敢な文化人の存在に他ならない。

(翻訳家、元当館語学受講生)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです!

- ・関西圏以外や外国にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
 - ・外出を控えられている方
- 受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>